

柔道の理想と現実の一考察

— 高校生柔道選手と大学生柔道選手の ICPAS の比較より —

武内政幸 (大東文化大学)
岡田龍司 (近畿大学)
平山聡子 (サンフランシスコ州立大学)
デービット・マツモト (サンフランシスコ州立大学)

A Study OF IDEAL AND REALITY ON JUDO

— By comparison between ICAPS of high-school judo athletes
and university judo athletes —

Masayuki Takeuchi (Daito Bunka University)
Ryuji Okada (Kinki University)
Satoko Hirayama (San Francisco State University)
David Matsumoto (San Francisco State University)

〔目次〕

Abstract

1. 緒言
 2. 研究方法
 - (1) ICPAS (Intercultural Adjustment Potential Scale) について
 - (2) 質問紙及び調査方法
 - (3) 被験者
 - (4) 分析方法
 3. 結果
 - (1) 高校生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICPAS 総合点の比較
 - (2) 高校生男子柔道選手の学年と ICPAS 総合点の関連
 - (3) 高校生男子柔道選手の段位と ICPAS 総合点の関連
 - (4) 大学生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICPAS 総合点の比較
 - (5) 高校生男子柔道選手と大学生男子柔道選手の ICPAS 総合点の比較
 4. 考察
 5. まとめ
- 引用・参考文献

Abstract

This study of which aim is to promote and develop Judo correctly and establish teaching methods and teaching philosophy as instructors is about the relationship between Judo training and positive spiritual and psychological outcome, by measuring the psychological characteristics which are necessary for intercultural adjustment among judo athletes in Japan.

To test this hypothesis, we collected data on the ICAPS (intercultural Adjustment Potential Scale) from 141 Japanese high-school male Judo athletes and 420 Japanese university male Judo athletes, and compared their scores to the ones of the reference group of 1271 Japanese.

It is the first attempt in the history of Judo to test the validity of the influence of Judo training on positive personality formation, using ICAPS experimentally.

We obtained the following results.

The Japanese high-school and university male Judo athletes were found to have significantly lower scores on the ICAPS total score, Emotion Regulation, Openness, and Flexibility than the Japanese reference group. The results suggest that these Judo athletes lack social, international, and intercultural communication that is mutually beneficial, and some important psychological skills that are necessary for adaptation. Their low scores on Emotional Regulation especially contradict the previous belief that Judo training should be useful for the development of emotional control and self-regulation, which in turn should contribute to the psychosomatic education.

Therefore, the findings of this study overturn the previous belief that the importance of mutual welfare and benefit (use of energy for good and co-prosperity of oneself and others) are considered as a motto of Judo training, and question the validity of the ideal of Judo that training should be useful for positive personality formation.

The results should create the opportunity to reevaluate the whole concept of training methods of Judo in the Judo world in Japan.

Key words :

Judo, ICAPS, High School Judo athletes, University Judo athletes, Japanese Reference Group

1. 緒言

闘争を原点として発達してきた武道は、現代では教育の一端も担っている。阿部¹⁾は「武道とは、我が国古来の尊い遺産である国技の自主的な学習を通して、日本人としての自覚を深め、心身の健全な発達と民主的性格の育成を目指し、同時に将来の生活力を高め、人類の平和に貢献し

うる剛健な身体と意志力の養成をはかる教育活動である。」と定義し、モラルや心身面の教育に武道は重要な役割を果たし、武道のもつ伝統的文化性の教育的意義について述べている。

また、阿部は「しかし、未来に向かっては、現在もまた過去のな意義をもつ、それだけに、現在の武道のあり方を深く検討し、改善し、より合理的に生活に密着させる工夫がなされねばならないと思う。」と述べているが、武道全体は果たして今日の社会・文化的関心に適応しているであろうか。

日本の伝統的運動文化の武道の一つである柔道は今日、国際的スポーツの一つであるだけでなく、日本においては体育・勝負・修身という目的を付与され、人格形成の有効な手段として教育界にその根をおろし知的、身体的、更に道德教育の一環として考えられてきた。

柔道の創始者嘉納師範は柔道を心身の力を最も有効に使用する道と言い、柔道修行の究極的目標を「己を完成し世を補益する」とし、柔道精神を「精力善用・自他共栄」とその理想を掲げている^{12), 18)}。しかし、現実には柔道が国際的に普及し、世界のスポーツとしての発展に伴い、柔道は本当に人格形成に役立っているか、また、若い人たちの教育に柔道は有機的に機能しているかと久しく識者より指摘されてきており^{14), 25), 26)}、同様の指摘は現在も多く聞かれる^{9), 11), 23)}。全日本柔道連盟が2001年より柔道ルネッサンスと称して柔道人のマナー等に対する啓発活動を積極的に行っているのも、前述の指摘と無関係ではない。

もし柔道が嘉納師範の理想に沿って本当に他のスポーツよりも人格形成等に役立つのだとすれば、柔道の修行者が本来受けているべきプラス効果を確認するのが必要である。しかし、柔道選手に対しての性格特性やイメージ、意識についての研究は多々あるものの、実際に柔道修行者の人格形成に伴う道德的特徴等についての実証的研究は船越⁷⁾、永木ら^{19), 20), 21)}、山崎ら²⁹⁾の研究はあるものの比較的すくない。

また、日本は20世紀の後半より多岐の分野で「国際化時代」が進行している。国際化時代の現代、国際社会との関係を見無視しては国として立ち行かないことは周知である。しかし、世界には厳然として「異なった文化（異文化）」が存在し、この異文化の理解なくして政治・経済をはじめ種々の活動は難しくなる。

したがって、異文化の理解や異文化適応能力の育成は今後あらゆる分野で課題となり、異文化を超えるための心理特性を理解することは益々重要になると思われる。これは国際的スポーツに発達した柔道にとって、更なる正しい柔道の普及・発展のためにも必要なことであろうし、学校教育の中で柔道を指導する我々は必須の事であると思われる。

このようなことから、益々加速する国際化時代に適応する柔道修行者の育成のため、高校生、大学生柔道選手を異文化適応の観点から研究し、柔道の修行が異文化適応能力の向上に貢献しているかどうかを検討することは重要な意味を持つと思われる。なぜなら、この異文化適応能力、ICAPS (Intercultural Adjustment Potential Scale) をはかる尺度が社会適応能力の形成に関連する心理的スキルを測る為、柔道修行の目的やゴールについて語られる、「人格」の概念の一面も評

定すると考えられ、心と人格の形成は柔道の修行に伴うものであると言われている説を、実際に ICAPS を測定 of 道具として柔道の理想と現実（柔道修行の効果）を検討することは究めて重要なことと思われるのである。

本研究は、正しい柔道の普及・発展をはかり、また指導者として指導上の理念確立を目標に、高校生男子柔道選手の ICAPS を調査し、その得点は先行研究¹⁶⁾の ICAPS 日本人標準得点と比較し、さらに、我々がすでに報告²⁷⁾した大学生男子柔道選手と比較した。そして、柔道修行がプラス面の心理的性質の形成に伴うもので、また、前述した人格形成の有効な手段であるという考えの妥当性を実験的に検討し、柔道の理想と、その修行の現実の考察を試みた。

2. 研究方法

(1) ICAPS (Intercultural Adjustment Potential Scale) について

ここで本研究にあたり、測定 of 道具とした ICAPS について若干説明する。

異文化適応が成功するための要素についての研究は、これまで様々な観点・テーマをとりあげて多くの研究者より膨大な数の研究が報告されている。しかし、これらの研究の多くは、例えば相手国や自国についての知識や言語・会話能力、赴任前の体験等知識要素についてのものが中心で文化や文化の違いなどをどのように考えるか等、いわゆる文化的観点から異文化適応性を測っているものが多く^{2), 3), 4), 5), 6), 8), 28)}、異文化への適応、異文化間コミュニケーション、それぞれ各国の文化に適したテストの必要性、ステレオタイプな文化の特徴等で欠ける点があるとの指摘がある¹⁵⁾。

今までそのような研究が行なわれていなかった大きな理由は、人格にプラス面の変化をもたらすと思われる幾つかの心理的または道徳的スキルを測る為の信頼性・妥当性が高い確かな手段が無かったからである。さらに、大抵の心理学分野で開発されたテストや測定法は日本以外の国や人々（大抵はアメリカ人である）に視点を当てて作られたものであり、日本人に対するこのようなテストの妥当性の一般化には、かなりの限界があった。

しかし、最近、異文化心理学や異文化コミュニケーションの分野の著しい進歩が、このギャップを小さくしつつある。

Matsumoto ら¹⁶⁾は、異文化適応における成功・不成功を決定する最も重要なプロセスのひとつは、自分および相手の感情の処理の仕方であり、つまり、知識・認識の問題ではなく、それは感情面からのアプローチであるとの結論から、1995年に心理的観点より異文化適応性を測る ICAPS (the Intercultural Adjustment Potential Scale) の研究に着手し、異文化適応能力と呼ばれる尺度 ICAPS を開発した。

ICAPS は個人が持つ国際的、異文化的、さらに社会適応性等に必要とされる心理的スキルを測るものであり、感情制御 (Emotion Regulation)、開放性 (Openness)、柔軟性 (Flexibility)、そし

て自主性/創造性 (Autonomy/Creativity) の4つの主要心理的スキルの尺度から成っている。さらに、その ICAPS は総合得点も計算され、一般的異文化適応性をも測る事が出来るようになっていいる。Matsumoto らは合計19もの ICAPS の研究を発表しており、それら一連の研究成果¹⁶⁾を報告している。それらは Internal, Temporal, さらに Parallel フォーム等を用いた信頼性や、Construct (Convergent と Divergent と Incremental を含む) と Predictive (Concurrent と Proscriptive を含む) 妥当性を十分に検討した研究であり、この ICAPS はアメリカ人、日本人を始めヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカ、中東、アジア人等々の3000人以上の標本を用いて標準化されている。

以上のように、本来 ICAPS は異文化コミュニケーションや異文化心理学の分野での使用を目的として作られたものであるが、この尺度が含む領域である感情制御、開放性、柔軟性、自主性/創造性は、柔道修行に必要な性格や心理的特徴に全て関連している。特に、感情制御は自己規制、さらに感情コントロール等に関係しており、柔道修行の大きな目的の一つとも云える精神形成に関係するといえ、柔道修行の心理学的相関の研究にもその応用性があると考えられる。さらに、全体的に社会適応性の尺度である ICAPS の総合得点は柔道修行の重要な心理学的関係を示しているはずである。

ICAPS を用いた様々な研究¹⁶⁾では、結婚満足度や人生への満足度、カルチャーショック、うつ病、不安感、一般的社会適応性等の人生における大きな問題事が ICAPS と相関関係があると報告されており、この尺度の有用性は心理学やコミュニケーションにおける研究だけでなく、柔道の多様な研究分野においても大きなプラスとなると考えられる。

(2) 質問紙及び調査方法

質問紙は前述した Matsumoto¹⁶⁾らが作成した ICAPS を用いた。(資料1)

この ICAPS (個人的思考や意見に対する調査) は

- 1) 感情制御 (Emotion Regulation)
- 2) 開放性 (Openness)
- 3) 柔軟性 (Flexibility)
- 4) 自主性/創造性 (Autonomy/Creativity)

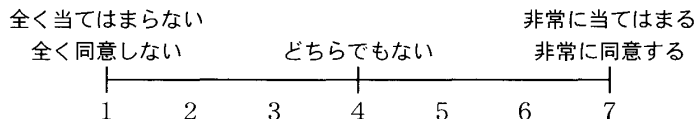
の4つのカテゴリーに分類された55項目である。

質問紙ではこれらの項目はランダムに配置され、それぞれの項目については7段階評価尺度法によって調査を行った。なお調査は大学生が2000 (平成12) 年11月10, 11日、高校生は2002 (平成14) 年3月23, 24日に実施した。

資料 1.

異文化適応能力テスト (ICAPS)

下の 7 階級の尺度を用いて以下の項目に答えて下さい。各項目のあなたの答えを最も最もよく示す数字を選んで下さい。例ば、その項目に強く同意する (又は非常に当てはまる) 場合は 7 を左の空欄に書き入れて下さい。そして、その項目にまったく同意しない (又はまったく当てはまらない) 場合は 1 を書き入れて下さい。



- 1. 空想をふくらますのが好きだ 1
- 2. 自分の夫や妻に異性の友人がいてもかまわない 2
- 3. 自分が正しいと確信していれば、あまり他人の議論を聞くことに時間を浪費しない。 3
- 4. 緊迫した状態に陥ると不安になる。 4
- 5. 誰かが不平等な扱いを受けているのを見ても、それほど気のならない時もある。 5
- 6. 普通は緊張時にうまく対処できる。 6
- 7. 自分はとても優しい人だと思う。 7
- 8. 子供の尻をたたくことは、最も良い罰の方法だ 8
- 9. 普段はあまり悩まない。 9
- 10. 心配したり、怖いと思うことがめったにない。 10
- 11. うまくいかないかもしれないとよく心配する。 11
- 12. 人と話をしても、それほど楽しいと感じない。 12
- 13. いつも他人より劣っていると感じる。 13
- 14. 上司が周りにいると居心地が悪い。 14
- 15. 何か間違ったことをしたら、それを人に隠したい。 15
- 16. 普段自分が無力に感じるので、誰かに改善して欲しいと思う。 16
- 17. (世の中には) 本当にどうしようもない人達がいる。 17
- 18. 一般市民は、政府の決定に影響を与えることができる。 18
- 19. バレイやモダンダンスを観るのは退屈だ。 19
- 20. マリファナを吸うことは、酒を飲むより喜が少ない。 20
- 21. 俳句が好きだ。 21
- 22. 喜びや悲しみを強く感じる事がなければ、人生は退屈だろう。 22
- 23. 香りは昔の思い出を呼び覚ます。 23
- 24. 自分は頑固だ。 24
- 25. 何事も毎回同じようにすることが好きだ。 25
- 26. 他人がすることを気にすべきでない。 26
- 27. 新しい食べ物を試すのが好きだ。 27
- 28. 家にいるのが好きだ。 28
- 29. みんな規則を守るべきだ。 29
- 30. 変化を与えるためだけに、部屋の模様替えをすることがある。 30
- 31. 休暇の予定を立てるのが好きではない。 31
- 32. いろいろな考えをめぐらすのが好きだ。 32
- 33. 普段は幸せだと感じている。 33
- 34. 自分が周りの人を差し置いて成功するのは、ほとんど運で決まると言っている。 34
- 35. 子供の頃は、学校を休むために仮病を使うことがあった。 35
- 36. すぐ怒る。 36
- 37. あまり興奮することがない。 37
- 38. 親切にすることは一番良いことだ。 38
- 39. 自分は古風だと思う。 39
- 40. 子供の頃、家出をしたと思った。 40
- 41. 現代の子供達の問題は、親が子供に十分に罰しない点にある。 41
- 42. 移民がこの国をだめにしている。 42
- 43. 誰も信用しない方がいい。 43
- 44. 詩を書いてみたことがある。 44
- 45. 死刑制度を支持する。 45
- 46. 両親はいつも私に厳しかった。 46
- 47. 頭のいい人は、私を居心地悪くさせる。 47
- 48. 深い水が怖い。 48
- 49. 男性と女性という時は、普通セックスのことを考えている。 49
- 50. 馬鹿な人だけが伝統的な生活を変えようとするものだ。 50
- 51. 性的なことに関する雑誌を処分したがる人は、精神的に正常ではない。 51
- 52. 自分の体に満足している。 52
- 53. 宇宙の起源について考えるのが好きだ。 53
- 54. 性教育を行うことは良いことだ。 54
- 55. 女性も男性と同じように性的自由を持つべきだ。 55

氏名(フリガナ)	性別	男・女	所属			
	年齢	才	学年	年	段位	段
	指導年数	年	経験年数	年	海外旅行の有無	有・無
競技開始時期	小学校以前・小学校低学年 (1. 2. 3. 年)・小学校高学年 (4. 5. 6. 年)・中学校・高校生・大学					

(3) 被験者

本研究の調査対象は高校生が24高校男子柔道選手208名、学年は1年から3年、年齢は15歳から19歳 ($M=16.55$, $SD=0.61$)、経験年数 ($M=7.20$, $SD=3.21$) で、内、有効回答数141。大学生は18大学男子柔道選手439名、学年は1年から4年、年齢は18歳から24歳 ($M=20$, $SD=1.13$)、経験年数 ($M=9.5$, $SD=3.60$)、内、有効回答数は420である。

(4) 分析方法

分析方法は、調査後回収された資料より、「全く同意しない」…1から「非常に同意する」…7までの7段階に調査内容を得点化し、それぞれの得点について、前述した Matsumoto らの一連の研究で行われた因子分析の結果より上記の4領域の得点を因子スコアの形で計算した。さらに、総合点 (Total) も計算した。その4領域得点と総合点を Matsumoto ら¹⁰⁾の研究での日本人1271名の標準得点 (以下、日本人準拠集団とする) の平均値 ($M=50$)、標準偏差 ($SD=10$) を用いて T-Score に換算し、比較した。さらに、高校生柔道選手の ICAPS 得点と大学生柔道選手の ICAPS 得点を比較した。

3. 結果

(1) 高校生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICAPS 総合点および4下位領域の比較

表1は高校生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICAPS 総合点および4下位領域の比較を示したものである。

高校生男子柔道選手の ICAPS 総合点は49.46で、日本人準拠集団より低いものの有意差はなかった。

感情制御は、高校生男子柔道選手は38.26と日本人準拠集団より有意に低かった。

開放性は、高校生男子柔道選手は44.74と日本人準拠集団より有意に低かった。

柔軟性は、高校生男子柔道選手は47.95と日本人準拠集団より有意に低かった。

自主性/創造性は、高校生男子柔道選手は54.54で、日本人準拠集団より有意に高かった。

また、高校生男子柔道選手の年齢および柔道経験年数と ICAPS との間には有意な相関は見られなかった。

表 1. 日本人準拠集団と高校男子柔道部員との比較

Iteme	Groups	高校男子柔道部員
	N	141
Total 総合点	Mean	49.46
	S.D	13.55
	T-test	-0.494
Emotional Regulation 感情制御	Mean	38.26
	S.D	8.32
	T-test	-17.163
Openness 開放性	Mean	44.74
	S.D	6.91
	T-test	-9.667**
Flexibility 柔軟性	Mean	47.95
	S.D	10.16
	T-test	-2.696**
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	54.54
	S.D	10.54
	T-test	5.569**

**P<0.01

(2) 高校生男子柔道選手の学年と ICAPS 総合点および 4 下位領域の関連

本データには高校 3 年生は 4 名であった。分析を行うためには各グループに 20 人以上が必要なため、これらを除いて分析を行った。t 検定の結果 ($t(141) = .638, n.s.$), ICAPS 合計得点における学年の差は見られなかった。しかし、ICAPS 下位尺度と学年の交互作用は有意であった ($F(3,423) = 3.156, p < .05$)。t 検定の結果、2 年生の柔軟性の得点が 1 年生よりも有意に高いことが示された。

(3) 高校生男子柔道選手の段位と ICAPS 総合点および 4 下位領域の関連

高校生男子柔道選手の段位と ICAPS について、t 検定を行った結果 ($t(145) = .383, n.s.$), ICAPS 合計得点における段位の差は見られなかった。また、段位と ICAPS の四つの下位尺度について、分散分析の結果 ($F(3,435) = .929, n.s.$), ICAPS 交互作用は有意ではなかった。しかし、段の主効果は有意であった ($F(1,145) = 11.179, p < .01$)。初段の部員の方が二段の部員よりも ICAPS 下位尺度得点が高いことが示された。

(4) 大学生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICAPS 総合点および 4 下位領域の比較

表 2 は大学生男子柔道選手と日本人準拠集団の ICAPS 総合点と 4 下位領域比較を示したものである。

大学男子柔道選手の ICAPS 総合点は 49.00 で、日本人準拠集団より有意に低かった。

感情制御は、大学男子柔道選手は 38.57 と日本人準拠集団より有意に低かった。

開放性は、大学男子柔道選手は 41.72 と日本人準拠集団より有意に低かった。

柔軟性は、大学男子柔道選手は 48.49 で、日本人準拠集団より有意に低かった。

自主性/創造性は、大学男子柔道選手は52.63で、日本人準拠集団より有意に高かった。

表 2. 日本人準拠集団と大学男子柔道部員との比較

Iteme	Groups N	大学男子柔道部員
		420
Total 総合点	Mean	49.00
	S.D	11.64
	T-test	3.34**
Emotional Regulation 感情制御	Mean	38.58
	S.D	7.59
	T-test	27.04**
Openness 開放性	Mean	41.72
	S.D	7.71
	T-test	17.05**
Flexibility 柔軟性	Mean	48.49
	S.D	9.81
	T-test	3.16**
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	52.63
	S.D	10.24
	T-test	5.87**

**P<0.01

(5) 高校生男子柔道選手と大学生男子柔道選手の ICAPS 総合点および 4 下位領域の比較

表3は高校生男子柔道選手と大学生男子柔道選手の ICAPS 総合点および 4 下位領域の比較を示したものである。

t 検定 (両側検定) の結果, ICAPS の総合得点と下位領域の感情制御, 柔軟性, 自主性/創造性に有意差は見られなかった。しかし, 高校生男子柔道選手の開放性の得点が, 大学生男子柔道選手の得点よりも統計的に有意に高いことが示された。

表 3. 高校男子柔道部員と大学男子柔道部員との比較

Iteme	Groups N	高校男子柔道部員	大学男子柔道部員	T-test
		141	420	
Total 総合点	Mean	49.46	49.00	-0.395
	S.D	13.55	11.64	
Emotional Regulation 感情制御	Mean	38.26	38.58	0.414
	S.D	8.32	7.59	
Openness 開放性	Mean	44.74	41.72	-4.131 **
	S.D	6.91	7.71	
Flexibility 柔軟性	Mean	47.95	48.49	0.559
	S.D	10.16	9.81	
Autonomy/Creativity 自主性/創造性	Mean	54.54	52.63	-1.901
	S.D	10.54	10.24	

**P<0.01

4. 考察

以上の結果、我々の先行研究²⁷⁾と同様高校生レベルでも柔道の修行がプラス面の人格を形成させるのに役立つというこれまでの意見への妥当性が疑問となった。本研究に参加した高校生男子柔道選手は大学生柔道選手と同じく日本人準拠集団と比べ有意な差が認められ、ICAPS 総合得点と下位領域の感情制御、更に開放性、柔軟性の面が劣っている事が解った。

藪根ら³⁰⁾は、「柔道の原理に関する研究」で、柔道の創始者嘉納師範が提唱した柔道精神「精力善用・自他共栄」の意味とその理解度を、大学生柔道修行者を対象にアンケート法で調査し、その結果、「精力善用」の意味を理解していると考えられた者は僅かに11.1%、また、「自他共栄」の意味を理解していると考えられた者は皆無であったと報告しているが、本研究結果は正にそれを裏付けるような結果ともいえる。

先行研究²⁷⁾でも述べたが、ICAPS の総合得点が有意な差をもって低かったことから、大学生柔道選手と同様に高校生男子柔道選手も上手くお互いのプラスになるような社会的・国際的・異文化的レベルでの交流やコミュニケーション、更に適応性に必要とされる幾つかの重要な心理的スキルが欠けている事を示唆している。それゆえ、本研究結果は今までの柔道のモットーの一つと考えられてきた相互福祉や利益の重要性（自他共栄）への貢献や可能性に疑問を投げかけるものであり、これは嘉納師範の柔道の理想に反している結果とも云える。

特に本研究被験者の柔道選手の感情制御の分野は、日本人準拠集団と比べ大きく有意に低い結果であった。感情制御は感情コントロールと関係しており、それはプラスで、かつ構成的で、また意味ある人生経験を導き、自分の利となるように上手く自分の感情を使いこなす事である。感情制御に有意な差が認められ、低得点を示している事から、これらの柔道選手が特に感情コントロールを行なう技術を身に付けていないと考えられる。このことは、感情コントロールや自己規制・制御の発達に柔道修行の副次的結果であると典型的に考えられていた事に対照的である。

また、自主性／創造性の分野が有意な差を持って優れている事、総合得点と感情制御、開放性、柔軟性の分野では、低得点を示すという心理特性を示していた。

それゆえ、本研究被験者の柔道選手の ICAPS の得点の全体的パターンは、従来からの柔道練習のあり方は柔道修行者の人格形成につながるという考えへの妥当性に疑問を投げ掛けたのである。ここで述べたデータは、これらの柔道選手の社会的・異文化的・国際適応力や自己規制（自己抑制力）、さらに感情コントロールや制御に関する技術が実際劣っている事を示唆している。また同時に、これらの経験をプラスでお互いに満足のいく関係に統合するのに必要な社会的スキルを身に付けていないとも推察される。

永木ら^{19), 20)}は、柔道修行者は「精神修養や精神的な一体感を重視する精神主義については認める傾向にあり、伝統的な価値観を踏襲していると見られる」また、柔道修行者は「自己鍛錬志向」を最も重視しており、そのことは「武道」の伝統的価値観を示す者と考えられる。さらに、

Nagakiら²¹⁾、山崎ら²⁹⁾は外国人修行者との比較に於いて、日本の柔道修行者の「精神修養」への強さが示唆されていると報告している。

しかし、本研究結果は柔道修行者の「精神修養」への強さへの思いとは裏腹に、柔道修行の過程の中で指導者が思っているほど、選手たちの精神修養や精神的成長は育成されていないとも推測できるのである。

本研究結果は、日本の柔道社会で柔道への取り組み方や、また、その指導のあり方の再考するきっかけとなるかもしれない。

日本のスポーツは、学校を中心として発展してきた歴史がある。最近では地域スポーツの振興が提唱され成功してきているスポーツも見受けられるが、柔道においてはまだまだ学校スポーツの役割は大きいと云える。Matsumotoら¹⁷⁾は、「日本でスポーツとしての柔道を最も重視しているのが、大学柔道指導者だということは興味深い。大学は社会において教育の頂点であるべき場所である。だがその大学で、人材育成という価値観に基づいた柔道がおこなわれていない。」との指摘をしているが、それは高校生レベルでも当てはまり、学校スポーツの競技スポーツ化傾向の中で、筆者らが近年特に感じている柔道の競技力に重点を置き（競技力至上主義）、柔道を通じてあるべき重要な教育を軽んじているのではないかと思われる学校柔道の実態を反映した結果とも考えられる。

柔道を取り巻く様々な議論^{13), 22), 24)}のなかで、柔道指導者とりわけ学校教育のなかで柔道指導に携わる学校柔道指導者の責務は大きいと共に、本来の柔道の教育目標における柔道の役割を果たすため、指導方法をどのように変えるべきか真剣に考えなければならない。

誰でも試合をする以上勝ちたいと思うし、勝利すれば賞賛され、一時期マスコミなどの寵児となり、その後の人生に大きな実りを持たせるかもしれない。その意味では選手も指導者も競技力至上主義、勝利至上主義になる気持ちも理解できないわけではない。しかし別の意味では、それだけでは学生の人生をむしろ犠牲にする危険性もある。石川は¹⁰⁾、「武道、あるいはスポーツを行う前に学生であるわけで、学生に要求されることは、きちんとやらなければならない。少なくとも学校の知的な教育でいえば、それを通るだけの知的能力は備えなければならないし、学校生活を通じて培ってゆく人間形成をやらなければならない。その上でスポーツをやるべきと思っている。少なくとも指導者はそういう考えであって欲しい」と述べているが全く同感である。

競技柔道の国際化のなかで競技力向上を目指すとはいえ、柔道の指導が学校教育の中で行われている場合、勝つことばかり（競技力至上主義）を優先した指導でよいのか。答えは否であろう。指導者は柔道本来の伝統的価値観の教育をもっと重視した指導の必要性を考えなければならないのではないか。今それを問われていると思われる。

以上、ここで述べた研究結果にも関わらず、柔道修行の利点への妥当性が少なくとも教育レベルで問われた事は今まで無いのである。また、この結果が架空か真実の物であることを明らかにする事は、柔道稽古による選手への心理的効果を頻繁に評価し、その上再評価する道へとつなげる

と推察される。また、このような検討をする事は、柔道が本来の役目を果たしているかどうかを判断し、柔道修行の目標設定や概念化、そのゴールを成し遂げる為のまた違ったトレーニング方法の開発を考慮するのに役立つのである。そして、それは柔道が実際に益々機能的でプラス面の心理的スキルを伴うようになっていくと思われる。

今日における柔道の存在の社会的意義はどこにあるのか、また、柔道は今後何をを目指すのか、社会に柔道は何の貢献が出来るのか、さらに、21世紀の世界に柔道は何を発信するのか。社会変化に対応するための柔道の研究はますます重要になる。

また、本研究被験者高校生男子柔道選手208名中67名の生徒のデータに ICAPS 得点での欠損値が含まれていたため、どの高校に欠損値が高いかを調べた。その結果、24高校の内6校に ICAPS 得点の欠損値データの比率が高いことが示された。そこで、それらの6校のデータを用い ICAPS のどの項目にて欠損値が多いのかを調査した。

その結果、67名中22名が項目2（自分の夫や妻に異性の友人がいてもかまわない）を、67名中16名が項目20（マリファナを吸うことは、酒を飲むより害が少ない）を回答していなかった。特に TD 高校の全ての生徒がこの2つの項目について全く回答していないことが解った。

このことをどの様に理解すればよいのか。指導者の指示か、あるいは生徒自身の判断か、また、これらのことも判断できないのか。今後さらに調査し検討を要する課題が示された。

5. まとめ

本研究は、正しい柔道の普及・発展をはかり、また、指導者として指導法や指導上の理念確立を目標に、柔道選手の異文化適応能力の心理的要素について研究し、柔道修行の理想に向かって、柔道の稽古がプラスな精神的、かつ心理的結果といかに関連するかを検討した。

この仮説を検討するにあたり、高校生男子柔道選手（141名）、大学生男子柔道選手（420名）を被験者として標準化した ICAPS（Intercultural Adjustment potential Scale）テストを実施し、それぞれの総合点は合計1271人の ICAPS 日本人準拠集団と比較した。

柔道修行はプラス面の心理的性質の形成に供するものであるという考への妥当性を ICAPS を用いて実験的に検討する事は、柔道の歴史において初めての試みである。

この結果、次の知見が得られた。

本研究に参加した日本の大学生、高校生男子柔道選手は、日本人準拠集団と比べ ICAPS 総合得点、更に感情制御、開放性、柔軟性の面が劣っている事が解った。ICAPS の総合得点が有意な差をもって低かったと認められたことから、これらの柔道選手が上手くお互いのプラスになるような社会的・国際的・異文化的レベルでの交流やコミュニケーション、更に適応性に必要とされる幾つかの重要な心理的スキルが欠けている事を示唆していた。特に、感情制御の得点の低さは、

柔道修行が感情コントロールや自己規制・制御の発達に役立ち、ひいては心身面の教育に貢献するというこれまでの考えと矛盾する結果となった。

それゆえ、本研究結果は今までの柔道修行のモットーと考えられてきた相互福祉や利益の重要性の精神（精力善用・自他共栄）育成の教育目標実現を否定してしまったと考えられ、柔道の修行がプラス面の人格を形成させるのに役立つという柔道の理想の妥当性が疑問となった。

本研究結果は、日本の柔道社会で指導のあり方を再考するきっかけとなると思われる。

本研究の一部は、第2回、第3回国際柔道連盟、世界柔道カンファレンス、及び日本武道学会第34、35回大会、日本体育学会第52、53回大会にて報告した。

引用・参考文献

- 1). 阿部忍：体育・スポーツ哲学論・武道論。不昧堂出版。1990。
- 2). Berry, J, W : Acculturation and psychological adaptation, In A. M. Bouvy, F. J. R. van de Vijver, P. Boski & P. Schmitz (Eds.), *Journeys into cross-cultural psychology* (pp.129-141), Lisse, Netherlands : Swets & Zeitlinger. 1994.
- 3). Berry, J. & Sam, D. : Acculturation and adaptation, In. J. W. Berry, M. H. Segall, and C. Kagitcibasi (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology, Vol 3 : Social and behavioral applications*. Boston, MA : Allyn and Bacon. 1997.
- 4). Furukawa, T. : Sojourner readjustment : Mental health of international students after one year's foreign sojourn and its psychological correlates. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 185, 263-268. 1997.
- 5). Furukawa, T., & Shibayama, T. : Predicting maladjustment of exchange students in different cultures : A prospective study. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 28, 142-146. 1993.
- 6). Furukawa, T., & Shibayama, T. : Factors influencing adjustment of high school students in an international exchange program. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 182, 709-714. 1994.
- 7). 船越正康：柔道の心理学的考察，大滝忠雄編，総説・柔道，不昧堂，pp.89-107. 1984.
- 8). Hammer, M., etal. : Dimensions of intercultural effectiveness : An exploratory study. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393. 1978.
- 9). 池間武俊：ルネッサンス事業は柔道発展の重要施策。柔道，講道館，VOL. 74, NO. 7, 1-3. 2003.
- 10). 石川忠雄：なぜ武道は必要なのか。武道，日本武道館，VOL, 370, 78-81. 1997.
- 11). 稲木 博：一人言。柔道，講道館，VOL. 74, NO. 12, 1-2. 2003.
- 12). 嘉納履正：伸びゆく柔道，桐蔭堂書店，1954.
- 13). 嘉納行光：年頭に当って。柔道，講道館，VOL. 75, NO. 1, 1-5. 2004.
- 14). 村本 誠：日本病と柔道。柔道，講道館，VOL. 58, NO. 3, 1-2. 1982.
- 15). Matsumoto, D. : 日本人の国際適応力，本の友社。1999.
- 16). Matsumoto, D., etal. : Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners : The Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations*, 1-28. 2001.
- 17). Matsumoto, D., etal. : CULTURAL DIFFERENCES IN THE VALUES OF JUDO INSTRUCTORS. *Research Journal of Budo*. 34-(1), 1-10. 2001.
- 18). 村田直樹：嘉納治五郎師範に学ぶ，財団法人日本武道館。2000.
- 19). 永木耕介，他：柔道愛好者の日本的スポーツ観に関する研究，*武道学研究*，29-(2)，36-44. 1996.
- 20). 永木耕介，他：柔道修行者のスポーツ価値志向に関する実証的研究，*武道学研究*，30-(2)，1-8. 1997.
- 21). Nagaki, K., etal. : A Comparative Study of Value Orientations Held by Japanese and French Practitioners

- of Judo, 講道館科学研究紀要, Vol. 9, pp. 81-88. 2002.
- 22). 尾形敬史, 他: 競技柔道の国際化, 不昧堂出版. 1998.
 - 23). 長田定光: 世界選手権を見て思ったこと. 柔道, 講道館, VOL. 74, NO. 11, 1-4. 2003.
 - 24). 佐々木武人, 他: 現代柔道論, 大修館書店, 1993.
 - 25). 塩谷宗雄: 剛から柔道へ, 柔道, 講道館, VOL. 53, NO. 4, 1. 1972.
 - 26). 杉山重利: 柔道の理念を求めて, 柔道, 講道館, VOL. 54, NO. 7, 2-4. 1983.
 - 27). 武内政幸, 他: 大学柔道選手の国際適応力, 大東文化大学紀要, 第40号<社会科学>, 221-231. 2002.
 - 28). Ward, C.: The A, B, C's of acculturation. In D. Matsumoto (ed.), *Handbook of culture and psychology*. New York : Oxford University Press. 2001.
 - 29). 山崎俊輔, 他: ニュージーランド柔道人の日本的スポーツ観に関する研究, 武道学研究, 30-(3), pp. 10-17. 1998.
 - 30). 藪根敏和, 他: 柔道の原理に関する研究, 武道学研究, 30-(2), pp. 9-25. 1997.

(2004年9月21日受理)